



道庁 都市医師会 だより

札幌市医師会 「市民医療フォーラム2011」

札幌市医師会 地域社会部長 笹本洋一

平成23年10月22日（土）午後1時より、札幌市民ホールにて、「市民医療フォーラム2011」が開催されました。ここで、その概要について報告いたします。

このフォーラムは、札幌市医師会と札幌市の共催により、札幌市民のニーズに沿った健康と医療をテーマに、障害者を含めた多くの市民に参加していただくよう、平成16年から開催され、今回で8回目となりました。会場では、札幌聴力障害者協会の協力で行った手話による舞台上での同時通訳と、札幌身体障害者福祉協会「ふきのとう」の協力により、文章による要約筆記のスクリーン拡大表示を行っています。事前申し込みは2,300名を超えましたが、会場の容量と安全上の問題から、全員に入場整理券をお渡することはできず、当日会場には1,411名の市民の方々にお越しいただきました。

司会進行はフリーアナウンサーの橋本登代子さんでした。開会にあたり、札幌市医師会を代表して山光進会長と、札幌市を代表して渡部正行副市長が挨拶されました。

今回のメインテーマは、「認知症と介護、その時、私たち家族にできること」です。第1部の基調講演は元プロ野球選手の桑田真澄さんに、第2部の健康トーク&パネルディスカッションには3名の先生方に、それぞれ講演をお願いしました。

第1部の桑田真澄さんは、「夢をあきらめない」と題してお話しされました。冒頭、桑田さんの紹介となるビデオが上演されました。PL学園時代の3年間に、5季連続で甲子園に出場し、優勝2回、準優勝2回を獲得。ドラフト1位で巨人に入団し、沢村賞などを受賞。2006年に大リーグのパイレーツに入団、負傷するもメジャー初登板、と記憶を呼び起こす内容でした。桑田さんは、1968年4月1日生まれ

なので、同学年ではいつも背が小さかったそうです。小学校では先輩からいじめられて、挫折しそうになりましたが、その試練を我慢と努力で乗り越え、中学時代には抜きん出た投手に成長しました。その桑田さんがPL学園で初めて同学年の清原和博さんに会って、その大きさにビックリしたそうです。そこで2度目の挫折を経験。それでも母親の後押しもあり、外野の玉拾いを続けながら、試練を乗り越え、PL学園の黄金時代を築いたそうです。本物に触れることが一番重要で、大リーグにも本物のマウンドで投げることが目的に入団したそうです。講演では、会場の市民に舞台に登壇してもらい、インタビューしたり、クイズをしたり、握手をしたりと、笑いを誘いました。協力してくれた市民一人ひとりに直筆の色紙を渡し大歓声を浴びていました。最後に、再びユニフォームを着ることになるでしょうと、お話しして講演を締めくくりました。

第2部では「認知症患者と家族の接し方」について、健康トークがありました。初めに、五輪橋産科婦人科小児科病院医師の丸山淳士先生が、「治る見込みのない病人の介護…あなたも倒れないために！」と、講演されました。認知症の介護では、「治る見込みがないから」などが原因でストレスがたまるそうです。もしストレスがたまったら、休息型リフレッシュ、発散型リフレッシュ、創造型リフレッシュを試して、自分を変えることで、うつになる危険を避けることができるそうです。自分を変える、希望を持つ、反省しない、明日の心配をしない、小さな自信を持つ、大きな感動と感謝の気持ちを持つ、自分を変えていくのが大事と、まとめられました。

次に、毎週火曜日に北海道テレビ放送（HTB）「イチオシ！ モーニング」でレギュラーコメンテーターを務めるときわ病院院長の宮澤仁朗先生に、「認知症介護とうつ病」について講演していただきました。認知症には脳血管疾患型、アルツハイマー型などがあります。初発症状は、記憶障害、見当識障害、つまり、日時、場所が分からなくなることが多いそうです。アルツハイマー型は最も多く、身体的障害がほとんどなく、現実離れた世界に入ってしまうため、集団生活を通じた対応を重視することが大事だそうです。一方、脳血管性認知症は個性が強調されるので、個別的対応を重視することが重要だそうです。新しい概念のレビー小体型認知症は、物忘れ、幻視が多いそうです。講演では、その患者さんと生活介護のVTRを通して介護の現実を提示してくれました。他方、うつ病には、精神症状と身体症状があり、朝に調子が悪く睡眠障害や体の不調が多いそうです。介護者は一人で悩まず、暮らしに楽しみやリフレッシュを取り入れることが大切とまとめられました。

最後に、旭町医院院長の堀元進先生に「喜びも悲しみも幾歳月」と題して講演していただきました。

介護者が初心者のうち、戸惑ったり悩んだりして対応方法が分からないが、ベテランはそれなりに対応し得る状態になることをお話しされました。実例として、たくあんをたくさん買い求める夫人とその家族の話がされました。昭和32年の映画「喜びも悲しみも幾歳月」のスチール写真やご自身のご家族の写真を示しながら、家族の話、旅行の話、人生の話などを通じて、人生の意味についてお話しされました。時に方言を交えながら、とても親しみのある講演でした。

3名の先生のお話のあとで、橋本登代子さんの司会により、パネルディスカッションがありました。丸山先生から、「介護の際に認知症患者は感情が残っているので、相手に合わせる事が重要」「いい薬が多いので、早く病院に行くことが大切」。宮澤先生から、「病院に連れていくためには、かかりつけ医からすすめたり、第三者からすすめたりしてもらうのが有効」。堀元先生から、「日本では在宅介護が多く、高

齢者が多い。患者が病院に来られるかどうかは、やってみるしかない」「認知症をささえる家族の会、SOS徘徊ネットワークなど地域や周囲の人が助け合う組織がある」との話聞くことができました。

市民医療フォーラムでは、参加された市民の方にアンケート調査を行っております。今回は872名の方に回答いただき、年代別では、60歳代が262名、70歳代が241名と多いのですが、例年より40歳代、50歳代の方の参加が増えております。内容については、大変良いが63.3%、良いが26.0%で、併せて89.3%の方が良いと回答しており、「桑田氏の『努力』や『試練』の話など、情熱と哲学に感動した」「認知症患者の実例を合わせたお話でとても参考になった」などのご意見をいただいております。これらを踏まえ、来年度もさらに多くの市民の方々に参加いただけるような企画を検討したいと思いますので、皆様のご協力をよろしくお願いいたします。



山光進会長



渡部正行札幌市副市長



桑田真澄氏



丸山淳士先生



宮澤仁朗先生



堀元進先生